

森川翠水の水墨画とハーブ

我が夫 翠水（スイスイ）が怒ることは ほとんどないから、手がかからないといえればそのとおりだし、少々なことでは痛いとか疲れたとか苦しいとか言うこともない。しかし、それは裏を返せば、スイスイが「痛い！」とか「苦しい！」とか「疲れた！」などと弱事（よわごと）を言った時は、すでに命が危ないというサイン！であることを私は経験から学んだ。

抗がん剤の影響で口中がひどい口内炎になり、何も受け付けられなくなりさすがのドクターもこれ以上の治療を断念しようとした時、たまたま作ったハーブティをおいしそうに飲んだ。へえこんな時だって、植物のパワーはちゃんと届くのだな。と、私がハーブを本格的に学び生活に取り入れるようになったのはそんな鈍感な翠水のおかげなのです。

痛い、苦しいには鈍感な翠水ですが「画を描くこと」では昔からとても頑固者です。生活がどんなに苦しくても、売るための画は描かない。だから、どうしても手術のお金が入用になった時になって、「前からあの画がほしいと言われているんだけど、売ってくるか」と言い「すみません。手術のお金が必要になったのであの画今から持って行ってもいいですか？」と電話して大きな画を抱えて出て行くのです。「欲しいと言って下さっていたのなら早く譲っておけばよかったのに・・・」と言うと「ああ、忘れてたんだ。この画気にいっているしねー」と少し淋しそうに出て行きました。

そして 色は使わない。筆と墨と紙だけしか使わない。それを頑なに守り続けどんな時でも自分の画を信じています。

物の形に捉われずに、物の本質を描こうとする目だけはいつも健在です。

それは、とてつもなく歴史ある建物であっても、日常に置き忘れられた一台の自転車であったとしても、いったんスイスイのフィルターを通してしまうと同じように価値あるものになっていくのです。

そしてあたかも何にも考えていないように、無造作に筆が動くので私は何度も騙されて筆を持って挑戦してみましたが、そんなわけにはいきませんでした。

沢山のご縁に助けられ、スイスイがここまで生きてこられたのが不思議なくらいだと私は思っています。ここまできたら、きっとまだ描かなければならない使命が残っているのにちがいないと覚悟して、せつせとハーブティとハーブ料理でこれからも守ってあげることにいたしましょう。

いえいえ、それが結構、私の楽しみでもあるのですからです。

(キョウコ)